

千葉文学賞における〈房総文学〉の形成とその変遷

徳 永 真之介

はじめに

二〇二二年一月一七日、千葉日報は一面に次の記事を掲載した。

千葉文学三賞を終了します

千葉日報社は主催事業の「千葉文学三賞」を終了します。三賞の核となる千葉文学賞は1957年に始まり、後に千葉児童文学賞、千葉随筆文学賞が加わり、現在の3部門の形となりました。創設以来、65年間の長きにわたり続けてきたことにより、当初より掲げて参りました房総文学の振興という目的は果たされ、一定の役割を終えたと判断しました。これまで千葉文学三賞に作品を寄せて下さった皆様、賞を支えて下さった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございます。

千葉県で生活する書き手にとって、千葉文学賞は創作の登竜門であり続けた。しかし、賞が終了して現在に至るまで、千葉文学賞の「房総文学の振興という目的」が本当に達成されたのか、又はどのように達成されたのかを検証する論考は存在しない。本稿

は、千葉文学賞受賞作品の内容、選評や受賞者のコメントなどについての分析から千葉文学賞が形成した〈房総文学〉の内実に迫り、さらには地方文学賞が持つ独自の役割を提案するものである。

一 千葉文学賞について

最初に、千葉文学賞についての基本的な事項を確認する。そして、これまでの文学賞研究を踏まえたくうえで、千葉文学賞の考察がどのような意義を持つのか示したい。

一 賞の概要

千葉文学賞は、前年度の「掌編小説募集」に引き続き、千葉新聞が一九五五年に創設した文学賞である。一九五七年には、廃刊した千葉新聞に代わり千葉日報が賞の運営を引き継いだ。そして、二〇二一年度の第六七回開催を最後に、二〇二二年一月に終了を宣告した。小説作品を対象とした千葉文学賞の他に、千葉児童文学賞、千葉随筆文学賞と合わせて「千葉文学三賞」とも称する。受賞者には一九九四年に藍綬褒章を受章した遠山あき、落語家の四代目桂右女助などがある。

募集要項の概要は以下の通りである。まず応募資格として、「千葉県内在住か、在勤・在学者で職業作家は除く」とある。内容及び分量については、「現代、歴史物を問わない。戯曲は除く。400字詰め原稿用紙27〜30枚」。同じ県内の文学賞でも、例えば千葉県市原市主催の更級日記千年紀文学賞は、作品内容を「市原市の地名や人物、行事、自然、歴史等を一語以上取り入れた小説、エッセイ」と指定している。それとは対照的に、千葉文学賞は実施の目的を「房総文学の振興」としつつも、内容面での制限は設けていない。千葉県で実際に生活する人々が自由な内容の作品を寄せたとき、どのような〈房総文学〉の傾向が表れるのか検証できるという点で貴重な文学賞である。

一・二 文学賞研究の課題

続いて、他の文学賞や文学賞の歴史における千葉文学賞の立ち位置について確認する。

そもそも日本において、文学賞の起源はどこまで遡ることが可能だろうか。日本で最初の文学賞として、一八九三年に『読売新聞』が募集した「歴史小説・歴史脚本懸賞」が挙げられる。同時期の一八九七年には『万朝報』が「毎週懸賞小説募集」を始め、この企画は二七年間続いた。この時期の小説懸賞について紅野謙介は、「小説に賞金をかけること、それは「文学への投機」のシステムである。不特定多数へ呼びかけ、選抜自体をメディアのなかでクロスアップする出版資本のイベント事業である。」と指摘している。懸賞は、大衆が文学の定義を共有するための手段であった。『近代文学合同研究会論集』第一号（二〇〇四・一〇）

の特集「新人賞・可視化される〈作家権〉」でも、作家の選抜装置としての文学賞に焦点を当てている。そのなかで例えば副田賢二は、創設初期である昭和十年代の芥川賞について、「作家であること」の権利を〈他〉に付与する制度である以前に、「自」文学の枠組みを擬制的に創出するための、想像力のシステムでもあった」と述べている。この記述に拠れば、文学賞とは、賞を書き手に授与することによって賞自体の性質を定めていく相互作用のシステムなのだ。文学賞研究においては、扱う文学賞の種類にかなりの偏りがあった。和泉司は『昭和文学研究』第七五集「研究動向 文学賞」（二〇一七・九）において、「文学賞についての考察・言及は、高度経済成長期が終わるまで、芥川賞と直木賞に限定された範囲についての、回想記や事典的まともに留まっていた。」と指摘している。芥川賞・直木賞以外の文学賞についての数少ない研究としては、五島慶一「講談社の〈作家権〉ビジネスの一樣相―野間文芸奨励賞とその周辺」（二〇〇四・一〇）、松村良「村上春樹の〈居場所〉——一九七五―八〇年における文芸雑誌の新人作家たちの状況——」（二〇一三・一一）などが挙げられる。

地方文学賞に焦点を当てた研究はさらに少ないが、例えば池田朋子・大貝彰「高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究」（一九九四・一〇）は、第一回「わたしの高山物語」受賞八作品に共通する高山の景観イメージを考察している。また、同じ二人の著者による「まちづくりの視点からみた地方文学賞公募の実態について」（一九九五・七）は、地方文学賞は一九九〇年頃から増加し、回を重ねるごとに応募数・作品レベルが向上し

ていることを明らかにした。同論文では、「公募を続けることで、地域像が次第に熟成され、地域に対する共通理解として蓄積されていくことを期待したい。」との見方も示した。しかし、受賞作品の内容にまで踏み込んで地方文学賞が育む地域像の変遷を追った研究は見当たらない。

そこで本稿では、過去の受賞作品の内容をその地域性に注目したときに、どのような共通・相違点が見られるのかを明らかにする。そして、先述した副田の見方を借りて、千葉文学賞を『房総文学』の枠組みを擬制的に創出するための、想像力のシステム』として捉え、千葉文学賞が終了した現在、『房総文学』を創出するシステムは今どこにあるのか、どうあるべきなのかという問題に対して提案を行う。

また、千葉文学賞受賞作品を概観できる第一回から最新回までの受賞作リストが存在しないことも、この賞の歴史を考える上で一つの障壁だった。そこで本稿では、筆者が独自に作成した千葉文学賞受賞作品一覧を論文の末尾に付す。

二 作品内容の変遷

千葉文学賞の創設を予告する記事は、その狙いについて次のように述べた。

三方海にかこまれ、肥沃な関東平野に接し、農水産県として発達してきた本県は今や京葉工業地帯の建設とともに大きく経済構造の変革を来しつゝ、ありますが、そこに奏でられる生活のリズムと波紋は本県固有のものであつて他の府県のそれ

ではないのであります、この固有の生活体験からは固有の文学、すなわち『千葉文学』が誕生せねばならない、本社がえて『千葉文学』賞を設定したのもこのような趣意からであり（後略）^⑩

同記事内の募集要項には「題 自由」とあるが、千葉県固有の文学を打ち出していくのだという強い決意がこの文章からよく伝わってくる。冒頭で引用した賞終了時の記事においても「房総文学の振興という目的」という表現があるように、千葉県の土壌が生み出す独自の文学を育てていくという賞の方針は一貫して続いていた。しかし、実際その狙いは作品の内容にどこまで反映されているのだろうか。本節では、作品に登場する具体的な地名の傾向、作品内におけるそれぞれの地域の描かれ方という二つの点から、作品内容の地域性を考察する。考察の対象とするのは、佳作以上の入選で紙面への掲載が確認できた一五九作品である。^⑪

二―一 登場する地名

一五九作品のうち、千葉県の地名が一回以上登場する作品は五作品存在する。全体の約三分の一にものぼる数だ。運営者が掲げてきた「房総文学の振興という目的」は、作品の舞台設定という点において確かに反映されていることがうかがえる。そもそも、賞創設以前の千葉県における文学の状況について、小説家の上田広は「千葉県における文学活動、運動は、残念ながらあまり活発とはいえない。ほんやりしているとそのあらわれなど、全然眼にとまらないほどである。」と述べている。しかし千葉文学賞をきっかけに、この問題は少なからず是正の方向に働いた。

もちろん、千葉県にまつわる地名が登場しているからといって、ただちに、作品が千葉県の風土を描いているということにはならない。千葉県の地名を用いるのは、同じ県民である千葉新聞・千葉日報読者へのサービスという側面もあるだろう。しかし、「僕はこの僕を生んで呉れた郷土のことを第一にと、三つ子の魂百までで、書き続けてゆき度い。」¹⁷⁾「千葉について私が一番よく知っていることといったら部屋の窓から毎日みていた海です。それなら書けるのではないかしらと……」¹⁸⁾などと受賞者が述べているように、その大半は自らの身の回りの生活から題材を採ろうとする堅実な創作態度に拠るものである。

千葉県以外の地名についてはどうか。意外なのは、「東京」という語が出現する作品も四二作品と多く存在することだ。これは、千葉県の地方文学賞であることを考えると一見異質だ。だが、実際に「東京」という単語が使われる表現を考慮すれば納得できる。例えば、一九六二年度（第八回）受賞作「牛の消えた村」（楠本佳夫）¹⁹⁾は、ある農村で飼われていた牛が突然いなくなるという事件を扱った物語だ。作品内で「東京」という語が唯一用いられるのは、語り手の「おら」が自身の住む村の村長について説明する場面だ。東京へ「便利屋みてえに」何度も通える村長の恵まれた境遇を示すことで、それとは対照的な「おら」や農村の立ち位置を浮かび上がらせている。ここでは、あくまで「東京」は「おらの部落」を説明するための一道具でしかない。このような、都会の代表である「東京」の後景化という演出は他の受賞作品でも多く見られる手法だ。

ちなみに、千葉県以外の地域を主な舞台とする作品も数多く存

在する。一九七八年度（第二四回）佳作二席「ガンデンデン（壬生狂言）の響」（大藪徳衛）²⁰⁾は、京都の反禅職人が対峙する貧困を描く作品であるし、一九九五年度（第四一回）佳作「能登まで」（生久島花）²¹⁾は、日々の生活に疲れた女性がタクシーで十万円以上かけて日本海を見に能登半島を目指す作品だ。千葉県で開催する文学賞であるにもかかわらず、描かれる地域にこれほどの多様性を有しているのは千葉文学賞の大きな特徴といえるだろう。

まとめると、確かに千葉文学賞は千葉県を舞台とする作品が中心をなしている。だが、千葉県以外の地域も多数登場する外部に開かれた文学賞なのである。

二―二 内容の分類

ところで、地方文学賞への応募者の立場から考えたとき、特定の地域を描くということとはどのような意味を帯びてくるのだろうか。この問題に対して実作者の立場から答えたのが、第一回阿波しらさぎ文学賞を受賞した小説家・大滝瓶太による論考「いかにして地方文学賞を受賞したか?——「賞レース」として考える実作」²²⁾だ。この中で大滝は応募作品の性質について次のように分析している。

まず「定型的な地方文学」を以下の2つに分類してみる。

・ その土地に根付いた認識によって描かれるネイティブの文学

・ その土地にとって異物であるよそ者の認識によって描かれるストレンジジャーの文学

両者の区別は、特定の地域（＝地方）をどこから見るかによつ

て決まる。

(中略)

もちろん、「徳島に住んでいるからといって、徳島について知っているわけではない」「必ずしも地元が好きだとは限らない」ということもありえる。つまり、視点が対象地域の内外かだけでなく、語り手が特定地域について抱いている理解・愛着の度合いも作品の性質を決める重要な要素になる。

(引用部分の太字は原文ママ)

しかし、大滝によるこの分類は千葉文学賞にそのままあてはめることはできない。その理由は第一に、千葉文学賞は応募者の条件を「千葉県内在住か、在勤・在学者」に限っているからだ(阿波しらさぎ文学賞は全国から応募可)。大滝の表現を借りれば、千葉文学賞は千葉県ネイティブの文学に自然と限定されることになる。

第二に、阿波しらさぎ文学賞が徳島ゆかりの事物・人物を作品中に登場させることを条件としているのに対し、千葉文学賞は内容に関してそのような条件を求めているない。前節で触れたように、「東京」をはじめとした千葉県以外の他地域が作品に多く登場するのが千葉文学賞の特徴だ。特に、千葉県は東京都に隣接するという特徴があるので、自分たちの住む地域に対して都会をどのように捉えるかというテーマが受け入れられる素地が自然と整っている。そして、千葉県以外の地方もよく作品に登場するため、「千葉・東京」という対立的構図を、より広く「地方・都市」と置き換えることが可能だ。これらを踏まえて、千葉文学賞受賞作品を次のように分類したい。

- ① 絶対的な地方を描いた作品
- ② 地方・都市を比較して描いた作品
- ③ 絶対的な都市を描いた作品
- ④ 多元的な地方を描いた作品

以下、一つずつ説明する。

二二二ー 絶対的な地方を描いた作品

まず、「絶対的な地方を描いた作品」とは、閉鎖的な農山漁村などの社会で生活するほかない人間の境遇を描いた作品を指す。千葉文学賞においては初期の作品に多い。

一九五六年度(第二回)入選二席「牡丹雪」(亜雁ふゆ⁽²³⁾)は、戦後まもない時期に「千葉県市原郡S村」で暮らす女性・菊枝が妊娠中絶手術を受ける過程を描いた作品だ。ジェンダーの側面から、この時代の農村で生きる女性の困難を描写することに取り組んだ。

これを最後にしたい。妊娠中絶は。

どんなに賢く、どんなに美しい子供が宿つていたのかもしれない、生命を削つてゆくということは、これ以上じぶんに侮辱を与えない。そして働きに出るのだ。持つてきた脱脂綿の下には履歴書を書く美濃紙と小筆を用意してきた。小使さんでもいいから使つてくれるところがあれば……。

自分の身体についての決定権でさえ夫の意向に委ねるほかない。この非常に困難な状況が、女性にとつての「絶対的な地方」だ。

梅田匡介は、第二回時点での千葉文学賞について次のように総括した。

私は千葉文学賞の審査は初めてだったが、やはり中央でやる懸賞小説などのレベルに比べると技術的には一段下という気がした。しかしまた中央とは違ったローカルカラーがあふれた作品の多いことに感心した。例えば農民、漁師の生活に取材したものが多くこと封建的な農漁村にうごめく人々の苦悩の姿が描かれているという点では大変い、傾向だと思われ、千葉文学賞設定の意義もあると意を強くした次第²⁵。

筆者または語り手が知覚し得る範囲内の世界をまず描き切るというのが、地方文学像を手探りで確立していくなかで第一に必要なとされたことだったのだろう。

二・二・二 地方・都市を比較して描いた作品

戦後、復興や技術革新が著しく進行するなかで、開発を遂げた都市とそこから取り残された地方との差は次第に顕在化していった。地方と都市の境界で板挟みになる人間を描くのが、〈地方・都市を比較して描いた作品〉だ。

一九八四年度（第三〇回）受賞作「遙か彼方の島」（近藤早希子²⁶）は、出世を遂げた会社社員である中年の主人公・末二が母の卒寿のお祝いをきっかけに、忘却していた故郷を思い出す作品だ。故郷は彼には、出来ることなら抹殺したい忌しい場所だった。

厚い藁ぶきの屋根、太く黒くすんだ梁、部屋を仕切る木の扉。それらに郷愁を感じる人は、その中で貧しく心をいじけさせ、己を蔑みながら育ったことのない者にちがいない。

ここでは地方という存在は完全に否定的に描かれている。末二は母の衰えにショックを受けるが、家族みんなに囲われて卒寿を祝ってもらった母の幸せそうな姿を見て故郷への認識を改める。

「いや、俺も田舎に住みたくなかった。地位が上ったって、少しばかり金が出来たって、きりがいいわね。おかあは幸せだ。あにさうも羨ましいよ」と吐露するほど、母を中心に広がる温かい光景を素直に受け入れている。しかし同時に、末二はこうも思うのだ。が、末二には解っていた。彼はすでに田舎に住めない人間だった。そういう意味では妻や娘と同じだった。彼はすでに自分の道を走っていた。明日になれば、やはり重役という悩み多い名を意識して東京へ戻っていくのだ。

都市での生活に完全に順応してしまった末二にとっては、故郷の生活は憧憬や懐古の対象であっても、自身が溶け込んでいける場所ではもうすではない。都市に暮らす中で、時折思い返すくらいしかできない「遙か彼方の島」なのである。

地方・都市の狭間での苦悩というテーマは、絶えず経済成長が進む時代に生きた人間にとって非常に切実な問題だった。

二・二・三 絶対的な都市を描いた作品

〈絶対的な都市を描いた作品〉は、都市の匿名性に埋没した代替可能な存在であることに悩みつつも、日々の労働に従事していくしかない人間を描く作品を指す。

一九八五年度（第三一回）佳作「途中」（寺内敏二²⁶）は、退職願を上司に提出する前の「ぼく」が、東京・お茶の水周辺を散策する話だ。退職願の作成から着想した主人公の契約についての考

察から物語は始まる。

実際、対等な契約などありはしない。それは契約書というスクリーンに現われた映画のようなものだ。人間が動き回り色とりどりの光景が展開しても、映写機のスイッチを切つてしまえば、すべてはハレー彗星ほどの現実感もなく、夢よりはない。契約によって関係が生ずるのではなく、関係によって契約が決まるのに、それでも「契約」を信じてしまう者は泣かねばならぬ。

地方に根付く血縁や地縁と違って、都市における人間関係は主に契約の蓄積で成り立っている。私情を挟まない契約はドライで心地よい関係を形作るように思えるが、実際はそうではない。より強大な権力を持つ片方による一方的な宣告で、契約の継続・終了はいとも簡単に決まってしまう。自らを成り立たせている契約について思いを馳せたときに立ち現れる、自分という存在の脆さ。それが、主人公が抱える鬱屈の正体だろう。道中、現在も司法試験を受け続けている旧友Kに偶然再会し、喫茶店に誘う。だが、「Kの内部で渦巻く不安」が自分のそれと共鳴してしまいそうで、「ぼく」の気分はやはり晴れない。夕暮れが迫り橋の欄干の側に立った「ぼく」は、退職願を空に掲げて、「今は、ゴールでもスタートでもない。ただの途中だ。いつまでたっても途中なのだ。」と悟る。

例えば「遙か彼方の島」の末二ならば、故郷を心の拠りどころにできるかもしれない。しかし、都市を彷徨う「ぼく」にそのような原風景を見出すことはできない。「ぼく」にとつて都市の生活は絶対的なものだ。常に途中の存在であるという自覚を基に、

かろうじて自らを奮い立たせるしかないのだ。

二・二・四 多元的な地方を描いた作品

都市に対しては地方とみなされる地域を、都市との対比ではなく、他の地方と並行して描き出すのが〈多元的な地方を描いた作品〉だ。これは、前三類型と違って地域が発展する歴史の中に位置づけることはできない。数こそ少ないものの、複数の地方を同じストーリーの中で描く受賞作品は時代小説にも現代小説にも存在する。

〈多元的な地方〉を描く作品において、想像力は重要な概念である。二〇一九年度受賞作（第六五回）「おぼーのゲルニカ」（鳥光宏²⁷）は、千葉県から「沖縄の国立R大学」に進学した大学生の島と下宿先のおぼー達家族との交流を描いた作品だ。様々な地域に思いを馳せる想像の力がこの物語を成り立たせている。作品名の「おぼーのゲルニカ」は、かつて大事故で身体全体が不自由になった娘のおぶ子のことを指す。

千葉から来た島、沖縄のおぶ子、そしてスペインの町ゲルニカという本来なんの関係もない複数の地域が、ピカソの一枚の絵画を介してつながっていく。それを可能にしたのは、おぶ子の姿に絵画「ゲルニカ」を見いだすという、島の想像力の賜物だった。

「おぼーのゲルニカ」は、個人の想像力によって地域間のつながりに意味が生まれていくという、〈多元的な地方〉の可能性を示した作品だ。

二・三 四類型に見いだせる共通点

ここまで千葉文学賞受賞作品の内容を、都市・地方という概念を軸にして分類した。それぞれの類型を比較してみると、突き詰めれば同じ事象を描いていると捉えることもできる。

例えば《絶対的な地方》と《絶対的な都市》は、両者の生活様式などは異なれど、個人が閉鎖的な空間内で追い詰められるという構図は変わらない。どちらの環境においても、結局は人間関係のしがらみで人は苦悩を抱えるのである。もっと抽象的に表現するならば、それは記憶のしがらみだ。閉鎖的な空間で繰り返し他者から圧力を受けるのならば、それは自身への否定的な記憶として蓄積し、行動するための活力を削がれていくだろう。たとえ地方・都市と複数地域にルーツを持てたとしても、「地方で過ごした嫌な過去から逃れられない」「都市化の波についていけない」などの軌轢を排除し切ることが難しい。だからこそ本稿では、《多元的な地方》を表現する文学が今後の地方文学の活路であると主張したい。同一の都市・地方内では視野狭窄に陥る危険があるし、都市への人口流出が止まらないなかで、地方・都市の上下関係を克服するのは現実的ではないだろう。幸い昨今のインターネット社会により、離れた地方同士でも容易に情報へアクセスできる環境は整っている。他地方の情報を積極的に取り入れ、自分が暮らす地方と合わせて多元的に表現する。そのような文学作品は地方での生活の風通しを良くするはずだ。そしてそのような地方文学の在り方は、次節で説明する文学コミュニティ形成にもあてはまるのである。

三 コミュニティ形成という役割

千葉文学賞は、優れた作品をただ掘り上げるだけでなく、応募者への激励の場や応募者同士を結び付けるコミュニティとしても機能した。本節では、千葉文学賞の運営という面からその意義を考察する。

三ー一 選考基準の傾向

本論文末尾に付す受賞作品一覧からわかるように、千葉文学賞は、「受賞作品なし」の年度が異様に多い。全六七回のうち、実に二二回、約三分の一の回が受賞作品を選出できずに終わっている。

千葉文学賞は、その年度で相対的に一番優れた作品を選出するという性質の賞ではない。たとえ受賞者を輩出できなくとも選考基準を高い水準で保ち続けることによって、応募者のレベルを引き上げることが目的とした文学賞だと推測できる。

応募作品のレベルが選考基準に適うかという面では、審査員は苦勞しているようだ。次に引用するのは、一九七三年度（第一九回）の審査合評だ。

A 残念ながらことしも千葉文学賞に該当する作品はなかったね。

B どうも全体的には初めてのころの方がはるかにレベルは高かったようだ。

C そうだ。第一回の加瀬允雄の「牛」とか、亜雁さんの

「牡丹雪」とか、印象に残っている。

D それに、庄司肇とか（現在審査員）、滝由之介といったベテランが佳作入選だったこともあるしね

B 最近の応募作に、滝君あたりの作品がはいれば絶対に千葉文学賞だが……⁽²⁸⁾

作品レベルの変遷については客観的な指標で測ることは難しい。しかし、確かなこととして一つ言えるのは、選考基準が厳格でも千葉文学賞の存在自体が応募者の励みになり続けていたということだ。「受賞作なし」の年度においても必ず複数の作品を佳作入選させており、原則として紙面に作品全文を掲載している。受賞作品一覧からわかるように、受賞まで至らなくとも何度も作品が掲載される筆者も現れた。

また選評においても、応募者の過去作品まで考慮しており、応募者が今後も執筆を続けていく励みになるような選考を行うという姿勢が共通している。

ここまで述べてきた千葉文学賞の傾向は、可能な限り多くの千葉県の書き手を輩出できたという点では確かに有益だった。そして、この利点は次項で述べる受賞者同士のコミュニティ形成という側面においても役立った。

三・二「槇の会」の存在

『槇』は、千葉県市原市を拠点とする文学同人「槇の会」が一九七八年から二〇二四年現在に至るまで、年一回発行している同人誌である。槇の会会員の一人で一九七七年度（第二三回）に『雪あかり』で千葉文学賞を受賞した遠山あきは、槇の会創設の

いきさつについて次のように語っている。

確か、千葉文学賞の二十回目ぐらいだったと思いますが、何人かの受賞者を集めた座談会が開かれて、その後の雑談の中で、受賞後、受賞者たちがどうなっているのかまったく分からない。交流もない。（中略）千葉の文学の方向というか、大きく言えば、文化の突破口みたいなものを千葉文学賞が作ってきたのに、これではもったいない、ということだったんだと思います。⁽²⁹⁾

千葉文学賞受賞者同士の研鑽を目的として槇の会が設立された。その後も千葉文学賞の受賞者を取り込むことで存続してきた槇の会だが、二〇二〇年に転機が訪れる。第一回「槇」新人賞の募集開始だ。「槇の新たな可能性を拓く埋もれた才能を発掘すること」を目的としたこの賞は、千葉日報の紙面においても取り上げられた。そして、この翌年に千葉文学賞は終了する。当初の目的は会員数の増加であったが、結果的には、千葉文学賞の「房総文学の発展」という役割を引き継ぐこととなった。実際、千葉日報は毎年の「槇」新人賞募集のお知らせを紙面で紹介している。⁽³⁰⁾

しかし、この「槇」新人賞も第四回をもって一旦休止することとなった。代表の乾浩は「年々、応募する方々が少なくなり、それを打開するために、今回で新人賞公募は一旦休止して、早い時期に、新たな企画で「文学を愛する仲間を募る」ことにしました。」と述べている。槇の会が千葉文学賞の理念を受け継いでいったように、千葉県を地盤とする文学コミュニティは形を変えながらこれからも続いていくはずだ。

仲間づくりという側面で、槇の会は千葉県という地域に囚われ

ない動きも見せている。

幸い、『文芸思潮』を主宰する五十嵐勉氏が提唱して「全国同人雑誌協会」が設立され、同人誌の横の繋がりができた。「横の会」も千葉文学賞受賞者の会という狭い枠から脱皮しつつ千葉を基盤にして積極的に全国の同人仲間に参加しようと思っている。言霊と文学の再生をめざして！^③

房総文学は、千葉文学賞を経て新たな段階を迎えている。作品のテーマという面においても、それを支える人間同士の交流という面においても、千葉と他地方の横のつながりが重要な概念となりつつある。今後もその流れは続いていくだろう。

おわりに

以上本稿では、千葉文学賞を作品の内容面・賞の運営面という二つの観点で分析し、今後の地方文学を活性化させるための指針や重要となる作品テーマまで明らかにした。

まず、千葉文学賞の作品は主に〈絶対的な地方を描いた作品〉〈地方・都市を比較して描いた作品〉〈絶対的な都市を描いた作品〉〈多元的な地方を描いた作品〉という四類型に分けられる。特に〈多元的な地方を描いた作品〉は個人の想像力が鍵となる類型の文学で、今後の地方文学において重要となる。加えて、〈多元的な地方を描いた作品〉が提示する異なる地方同士の横のつながりという概念は、地方文学を形成する人々の持続可能な在り方にも適用できる。そしてそのような在り方は、中央の文学賞が持ち得ない、地方文学賞だからこそ実現できる財産なのだ。

【注】

(1) 実際には一九五七年時点で第三回を迎えている。

(2) 「千葉文学賞三賞」募集要項（『千葉日報』二〇二一・一一・二一、二面）

(3) 「千葉文学賞三賞」募集要項（前掲）

(4) 市原市「第5回更級日記千年紀文学賞の募集要項の発表」
<https://www.city.ichihara.chiba.jp/article?articleId=66c05a258d9eb90cd6011bfa>（最終閲覧日 二〇二四・一一・二六）

(5) 紅野謙介『投機としての文学―活字・懸賞・メディア』（新曜社、二〇〇三・三）二二―六一頁

(6) 紅野謙介『投機としての文学―活字・懸賞・メディア』（前掲）二六頁

(7) 副田賢二「作家権」の構造―昭和十年代の『文芸春秋』と新人賞をめぐる―（『近代文学合同研究会論集』第一号、二〇〇四・一〇）一五頁

(8) 和泉司「研究動向 文学賞」（『昭和文学研究』第七五集、二〇一七・九）一四〇頁

(9) 五島慶一「講談社の『作家権』ビジネスの一樣相―野間文芸奨励賞とその周辺―」（『近代文学合同研究会論集』第一号、二〇〇四・一〇）

(10) 松村良「村上春樹の〈居場所〉―一九七五―八〇年における文芸雑誌の新人作家たちの状況―」（『日本文学』第六二巻第一号、二〇一三・一一）

(11) 池田朋子・大貝彰「高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究」（『都市計画論文集』第二九巻、一九九

四・一〇)

(12) 池田朋子・大貝彰「まちづくりの視点からみた地方文学賞公募の実態について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F・1、一九九五・七)

(13) 池田朋子・大貝彰「まちづくりの視点からみた地方文学賞公募の実態について」(前掲)二〇〇頁

(14) 「短篇小説募集 千葉文学賞を設定」(『千葉新聞』一九五四・一一・一六、一面) (原文ママ、以下同じ)

(15) 紙面への掲載が確認できなかった一九五五年度(第一回)入選三位、佳作一〇十位、一九五六年度(第二回)佳作一〇八席、準佳作①⑨、一九五七年度(第三回)佳作一〇十席、一九五八年度(第四回)佳作二〇十席、一九五九年度(第五回)受賞作、佳作二〇四席、一九六〇年度(第六回)佳作三〇五席、一九六一年度(第七回)佳作六席、一九六二年度(第八回)佳作二〇五席、一九六三年度(第九回)選外佳作二作、一九六四年度(第十回)準佳作一・二席、一九六六年度(第一二回)佳作二作、一九六八年度(第一四回)、佳作一〇三席の計六八作品を除く。

(16) 上田広「論壇 千葉文学の展望」(『千葉新聞』一九五四・一一・二五、三面)

(17) 庄司豊「受賞から一年経て」(『千葉日報』一九五九・一・三、五面)

(18) 「第27回千葉文学賞受賞山本楓さん 受賞作は締切りギリギリに執筆」(『千葉日報』一九八四・五・一、四面)

(19) 楠本佳夫「牛の消えた村」(『千葉日報』一九六三・一・一、

一五面)

(20) 大藪徳衛「ガンデンデン(壬生狂言)の響」(『千葉日報』一九七九・五・二二、八面)

(21) 生久島花「能登まで」(『千葉日報』一九九六・四・二二、七面)

(22) 大滝瓶太「いかにして地方文学賞を受賞したか?——「賞レース」として考える実作」(蓼食う本の虫) <https://tadeku.net/80142/> (最終閲覧日 二〇一四・一一・二六)

(23) 亜雁ふゆ「牡丹雪」(『千葉新聞』一九九六・一・三、六面)

(24) 梅田匡介「審査員講評(続) 印象に強く残った「牡丹雪」」(『千葉新聞』一九九六・一・六、四面)

(25) 近藤早希子「遥か彼方の島」(『千葉日報』一九八五・五・一五、八面)

(26) 寺内敏一「途中」(『千葉日報』一九八六・五・二六、八面)

(27) 鳥光宏「おぼろのゲルニカ」(『千葉日報』二〇二〇・七・一五、一四面)

(28) 「千葉文学賞審査合評 内容吟味し題名を 応募多いが水準低下」(『千葉日報』一九七四・四・四、四面)

(29) 「房総文学の進むべき道探る 40周年迎えた「千葉文学賞」対談」(『千葉日報』一九九七・一〇・二〇、三四面)

(30) 乾浩「新たな「横の会」の始動」(『横』第四四号、二〇二一・一一) 五頁

(31) 「横の会」新人賞創設 7月まで小説作品募集」(『千葉日報』二〇二一・一・二二、二〇面)、「房総文壇の書き手発掘へ 第2回新人賞作品募集」(『千葉日報』二〇二二・六・九、九

面)、「房総文壇の書き手発掘へ 横の会 第3回新人賞作品募集」(『千葉日報』二〇二二・一二・二九、八面)、「房総文壇の書き手発掘へ 横の会 第4回新人賞作品募集」(『千葉日報』二〇二三・一二・二八、八面)

(32) 「第四回横新人賞選評」(『横』第四七号、二〇二四・一一) 一八〇頁

(33) 乾浩「同人誌の言霊と『横の会』の在り方」(『横』第四六号、二〇二三・一一) 五頁

【付表】千葉文学賞受賞作一覧

年度	受賞作品
一九五五 (第一回)	入選一位 加瀬允雄「牛」 二位 飯島武雄「与平の生と死」 三位 滝由之介「腐蝕したブリキの月」 佳作一位 江畑恭子「麦」 二位 熊倉俊彦「現代のキリスト」 三位 杉ひろし「死ななかつた政辰」 四位 北見玲吉「確執」 五位 林いわを「ペンギン」 六位 庄司肇「道化」 七位 今泉秀雄「黒鯛」 八位 牧三千馬「パネルの中で」 九位 吉川弘「血漿」 十位 柴東海夫「猟犬」
一九五六 (第二回)	入賞作なし 入選一席 庄司肇「死んだ港」

一九五七 (第三回)	二席 重雁ふゆ「牡丹雪」 三席 北見玲吉「R河港」 四席 滝由之助「ボルジャンカ」 五席 榛原昭寿「中学生」 佳作一席 稲石城「暗夜の火柱」 二席 江上健「脱出」 三席 千葉秀太「木せい」 四席 古川弘「語らざる告白」 五席 勝田活自「乾いた歌」 六席 徳島群三「姉のこと」 七席 北原燎「赤い紐」 八席 伊藤直彦「利鎌」 準佳作 ①坂三吉「演技」 ②宇野一郎「晩夏」 ③林いわお「どろんこ」 ④徳島群三「夜の帷の影の下に」 ⑤飯島武雄「忠臣」 ⑥山野なか「母と子」 ⑦北原雅吉「水つ洩」 ⑧戸井栄三「台風」 ⑨須和田光子「萩」 入賞 庄司肇「星を掃く女」 佳作一席 田中定治「起伏」 二席 田沢晋「断層」 三席 宮内章「K浜キャンプ場」 四席 小谷野由之助「死霊華」 五席 平岡幸一朗「にわか盲」 六席 吉野允子「黄バラ」
---------------	---

一九五八 (第四回)	入賞 伊藤俊栄「貝殻の道」 佳作一席 岡本香夜子「こおろぎの季節」 二席 江上健「天使昇天」 三席 津島俊「早食い三左」 四席 宮内章「黒いリボン」 五席 高梨勝弘「真如寺」 六席 小室寛「島」 七席 伊藤直彦「花嫁」 八席 長岡美子「嘘の嘆き」 九席 上村勝美「子供への敵」 十席 須藤治夫「誤算」	七席 笹野圭子「小さな風景」 八席 須藤治夫「ハーモニカ」 九席 林洋「ハンブルグにて」 十席 稲石城「峠の声」
一九五九 (第五回)	入賞 榎本その「ねこ」 佳作一席 伊藤直彦「小女」 二席 横山美智子「川端の家」 三席 伊藤晃「えん魔堂横丁」 四席 高田潤「霧」	
一九六〇 (第六回)	入賞作なし 佳作一席 伊藤直彦「ある職域」 二席 鶴沢勲夫「すっこんすっこん」 三席 吉住侑子「婆の王国」 四席 宗像信也「おけらと人形と」 五席 上村俊「夜の電車」	
一九六一 (第七回)	入賞作なし 佳作一席 尾形重信「河鹿」	

一九六二 (第八回)	入賞 楠本佳夫「牛の消えた村」 佳作一席 坂口和男「空襲」 二席 安房三四郎「紅い導灯」 三席 中条厚「一番風呂」 四席 須和田光子「裸木は知っている」 五席 林清継「孤影」	二席 伊藤直彦「崖」 三席 太田芳樹「わかものたち」 四席 吉住侑子「薄日の女たち」 五席 鶴沢和夫「アダムの子」 六席 佐々悠「奇襲作戦成功す」
一九六三 (第九回)	入賞作なし 佳作一席 土田明子「干し柿」 二席 菊池俊之「べか舟挽歌」 三席 林清継「しあわせ」 選外佳作 桧垣幹雄「順平先生とタクシー」 大野文弥「渦」	
一九六四 (第一〇回)	入賞作なし 佳作一席 有田弘子「風のない沙漠」 二席 菊池俊之「鯉」 準佳作一席 太田末松「女でない母」 二席 大野文弥「罨」	
一九六五 (第一一回)	入賞作なし 佳作一席 馬嶋武「貧乏路線」 二席 大野文弥「寒雷」	
一九六六 (第一二回)	入賞作なし 入選 有田弘子「果てしなき白い道を」 佳作 北里啓「つたかずら」	

	根津隆「漂鳥」
一九六七 (第二三回)	入賞作なし 佳作一席 船岡久伸「からっ茶」 二席 須和田光子「かな子という女」
一九六八 (第一四回)	入賞 浅野誠「講堂」 佳作一席 春林秀夫「青い散歩道」 二席 清水良久「思い出」 三席 塩原汎雄「残されたもの」
一九六九 (第一五回)	入賞作なし 佳作 大野文弥「ある日突然」 石井昇悟「登久子の恋」 小谷信久「傾斜地」 藤崎美佐子「Sの弁明」 房田義直「砂を噛む女」
一九七〇 (第一六回)	入賞作なし 佳作 大野文弥「かささぎ」 石井昇悟「ある断絶」 深山矩子「再生」 有田弘子「菜の花のある宴」 房田義直「草は枯れない」
一九七一 (第一七回)	入賞 植島遊子「佐七ま」 田口寿子「蝶の命」 佳作 林俊「犬吠行」
一九七二 (第一八回)	入賞作なし 佳作一席 石井利秋「老年の午後」 二席 森内和夫「さざなみの畠野」 三席 宮本勝「蛸の足音」
一九七三	入賞作なし

	(第一九回) 佳作一席 土岐猿介「肉塊の微笑」 二席 岡田徳一「きっかけ」 三席 吉田美奈子「木村」
一九七四 (第二〇回)	入賞 竹内紀吉「坂道」 佳作一席 岡田徳一「逃走」 二席 遠山洋子「旅立ちの朝」
一九七五 (第二一回)	入賞一席 大野俊郎「鳥の音」 二席 金田脩「帰り道の出来事」 三席 吉野孝治「鮎溜まり」
一九七六 (第二二回)	入賞一席 (県知事賞) 小川由香利「陥穽」 二席 (県議会議長賞) 田野瀬日米代「日曜日」 佳作一席 (房総文化懇話会賞) 山本祐基子「二枚のはがき」 二席 (ニューナラヤ賞) 日暮幸子「継ぎ穂」 三席 (多田屋賞) 三次紀美夫「頸の音」 四席 (千葉テレビ放送社長賞) 岡田徳一「目」
一九七七 (第二三回)	入賞 遠山あき「雪あかり」 佳作一席 鬼沼光「掌」 二席 滝沢よし子「海揚がり」 三席 林優「朝に向かって」
一九七八 (第二四回)	入賞作なし 佳作一席 中田幸枝「祭りのあくる日」 二席 大數徳衛「ガンデンデン (壬生狂言) の響」
一九七九 (第二五回)	入賞作なし 佳作 遠山あき「絆」 中田幸枝「或る挽歌」 大數徳衛「橋の下」
一九八〇	入賞 花森太郎「辛夷」

(第二六回)	佳作 湯浅弘光「砂丘」
一九八一 (第二七回)	入賞 羽生田吉明「赤いバスケット」 佳作 望月優吾「菊の紋章」 入賞作なし
一九八一 (第二八回)	佳作一席 江沢誠「祖母の遺した言葉は」 二席 吉野孝治「赤ちょうちん」 三席 望月優吾「絵のなかのサチニ」
一九八三 (第二九回)	入賞 山本楓「朝の光の中で」 佳作 本田広義「妻の寝顔」 勝本久「転職」 酒井明「雲雀」
一九八四 (第三〇回)	入賞 近藤早希子「遙か彼方の島」 佳作 押元裕子「赫い月」 青山宗「化けてもシビン」 中村靖子「梟時計」 湯浅弘光「誕生」
一九八五 (第三一回)	入賞 佐々木初子「旧街道」 佳作 真田たま子「海辺の風景」 吉井宵平「永訣の彼岸」 寺内敏一「途中」 安田曜子「ラスト・フライト」
一九八六 (第三二回)	入賞 高橋正男「密漁者」 佳作 山倉五九夫「黒あざみ」 望月優吾「マビニ通りの雨」 檜垣幹雄「昼の月」 梶間健一「ロードレーサー」

一九八七 (第三三回)	入賞 田村文「秘めし旅」 佳作 出雲真奈夫「京子の夏」 谷チイ子「遠雷」 中条さよこ「トラブルバイク」 平野常治「Cyeブルース」
一九八八 (第三四回)	宮本須磨子「結露」 小茶富美江「タイムトラベラーズ」
一九八九 (第三五回)	入賞 勝山朗子「春の終わり」 佳作 小幡明子「雨おんな」 有田万里「ねずみとり」
一九九〇 (第三六回)	入賞 大西功「ダスピターニヤ」 佳作 伊藤玲「グリーン・クラブ」 中村靖子「鐘の音」
一九九一 (第三七回)	入賞 森町藍子「おっつあん」 佳作 望月照也「青春の部屋から」 安井浩容「柿の木の下で」
一九九二 (第三八回)	北阪昌人「墨のあと」 柴田道代「傷跡」
一九九三 (第三九回)	橘文子「仏の顔」
一九九四 (第四〇回)	入賞作なし 佳作一席 城恵子「秋の暮れ」 二席 藤城理恵「予感」
一九九五 (第四一回)	入賞作なし 佳作 生久島花「能登まで」 岡本昌枝「木守り柿」
一九九六 (第四二回)	入賞作なし 佳作 峯崎ひさみ「弔問客」

	<p>檀垣幹雄「赤い風」</p> <p>選外佳作 名取二三江「爪」</p> <p>切東武司「野鯉」</p>
一九九七 (第四三回)	<p>入賞作なし</p> <p>佳作一席 乾浩「波濤の向こうに―波の伊八と画狂人―」</p> <p>北斎―</p> <p>二席 山本日米代「秋の虫」</p> <p>尾田愛子「小母さん稼業」</p>
一九九八 (第四四回)	<p>入賞作なし</p> <p>佳作 中村靖子「着尺」</p> <p>八代みゆき「二十九歳のブルー」</p>
一九九九 (第四五回)	<p>入賞作なし</p> <p>佳作 柏原龍一「赫い川」</p> <p>紺野稜子「相似形」</p>
二〇〇〇 (第四六回)	<p>高橋伸子「ギャラリー・ツアー」</p> <p>佳作 風野涼一「黄昏で見えない」</p>
二〇〇一 (第四七回)	<p>入賞作なし</p> <p>佳作一席 木村誠二「STATION」</p> <p>二席 山下伸治「どこか遠くへ…」</p>
二〇〇二 (第四八回)	<p>冴場渉「コバルトアワー」</p> <p>松本和夫「エプロン日記」</p>
二〇〇三 (第四九回)	<p>峯崎ひさみ「福耳」</p>
二〇〇四 (第五〇回)	<p>藤原あずみ「暁の琵琶の音は」</p>
二〇〇五 (第五一回)	<p>小沢美智恵「冬の陽に」</p>
二〇〇六	<p>並木さくら「別れの輪舞曲(ろんど)」</p>

二〇〇七 (第五二回)	<p>手島みち子「イノセント・ムーン」</p>
二〇〇八 (第五三回)	<p>米本有里「冬の夜」</p>
二〇〇九 (第五四回)	<p>柴崎日砂子「はるゆりの歌」</p>
二〇一〇 (第五五回)	<p>清水一寿「見えないままに」</p>
二〇一一 (第五六回)	<p>朝矢たかみ「赤い女」</p>
二〇一二 (第五七回)	<p>梅田丘匠「横の家」</p>
二〇一三 (第五八回)	<p>門倉暁「真と偽のはざまに」</p>
二〇一四 (第五九回)	<p>五十嵐之弘「お弁当はチュリップとともに」</p>
二〇一五 (第六〇回)	<p>小松菜生子「黄泉比良坂」</p>
二〇一六 (第六一回)	<p>風野笙子「ホタル」</p>
二〇一七 (第六二回)	<p>野口絵美「不帰橋」</p>
二〇一八 (第六三回)	<p>宮岡みすみ「フォトフレイム」</p>
二〇一九 (第六四回)	<p>相羽亜季実「いのちの時間」</p>
二〇二〇 (第六五回)	<p>鳥光宏「おばーのゲルニカ」</p>
二〇二〇	<p>東野あゆみ「ソーダアイスキャンディー」</p>

(第六六回)	
二〇二一	蓮見仁「海の声を聴く」
(第六七回)	

(とくなが・しんのすけ 千葉大学文学部人文学科日本・ユーラシア文化コース二〇二五年卒業)